



日本の文学

34

内田百閒
牧野信一
稲垣足穂

中央公論社

内田 百閒
牧野 信一
稲垣 足穂

昭和45年 5月25日初版印刷
昭和45年 6月 5日初版発行

発行者 山 越 豊

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 東京プロセス株式会社
色刷口絵印刷 株式会社大熊整美堂
口絵写真印刷 東京プロセス株式会社
本文用紙 本州製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
函ボール 佐賀板紙株式会社
製本 協和製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

内田百閒

冥途

7

花火

10

短夜

14

件

21

山高帽子

27

東京日記

54

磯辺の松——柳檢校の小閑

84

サラサーテの盤

110

実説艸平記

特別阿房列車

牧野信一

爪

父を売る子

村のストア派

吊籠と月光と

ゼーロン

パラルダ物語

鬼涙村

160 122

275 254 239 223 203 190 183

裸虫抄

淡雪

稲垣足穂

フェヴァリット

地球

白昼見

弥勒

誘われ行きし夜

山本五郎左衛門只今退散仕る

A 感覚と V 感覚

488 453 440 394 357 337 321

302 290

注 解
説 年 譜

口 絵
挿 画

三島由紀夫

「弥勒」

加納光於

「花火」「山高帽子」「東京日記」

「磯辺の松」「サラサアテの盤」

「特別阿房列車」

川上澄生

「父を売る子」「村のストア派」

「吊籠と月光と」「ゼーロン」

「バラルダ物語」「鬼涙村」

村上 豊

「フェヴアリット」「地球」「白昼

見」「誘われ行きし夜」「山ッ本

五郎左衛門只今退散仕る」「A感

覚とV感覚」

加納光於

内田百閒

冥途

高い、大きな、暗い土手が、何処から何処へ行くのか解らない、静かに、冷たく、夜の中を走ってゐる。その土手の下に、小屋掛けの一ぜんめし屋が一軒あった。カシテラの光りが土手の黒い腹にうるんだ様な暈を浮かしてゐる。私は、一ぜんめし屋の白ら白らした腰掛に、腰を掛けてゐた。何も食つてはゐなかつた。ただ何となく人のなつかしさが身に沁むやうな心持でゐた。卓子の上にはなんにも乗ってゐない。淋しい板の光が私の顔を冷たくする。

私の隣りの腰掛に、四五人一連れの客が、何か食つてゐた。沈んだやうな声で、面白さうに話しあつて、時々静かに笑つた。その中の一人がこんな事を云つた。

「提燈をともして、お迎へをたてると云ふ程でもなし、なし」

私はそれを空耳で聞いた。何の事だか解らないのだけれども、何故だか氣にかかつて、聞き流してしまへない

から考へてゐた。するとその内に、私はふと腹がたつて来た。私のことを云つたのらしい。振り向いてその男の方を見ようとしたけれども、どれが云つたのだからぼんやりしてゐて解らない。その時に、外の声がまたかう云つた。大きな、響きのない声であつた。

「まあ仕方がない。あんなになるのも、こちらの所為だ」

その声を聞いてから、また暫らくぼんやりしてゐた。すると私は、俄にほろりとして来て、涙が流れた。何といふ事もなく、ただ、今の自分が悲しくて堪らない。けれども私はつい思ひ出せさうな氣がしながら、その悲しみの源を忘れてゐる。

それから暫らくして、私は酔のかかつた人參葉を食ひ、どろどろした自然生の汁を飲んだ。隣りの一連れもまた外の事を何だかいろいろ話し合つてゐる。さうして時々静かに笑ふ。さつき大きな声をした人は五十余りの年寄りである。その人丈が私の目に、影絵の様に映つてゐて、頻りに手真似などをして、連れの人に話しかけてゐるのが見える。けれども、そこに見えてゐながら、その様子が私には、はっきりしない。話してゐる事もよく解らない。さつき何か云つた時の様には聞こえない。

時々土手の上を通るものがある。時をさした様に来て、ぢきに行つてしまふ。その時は、非常に淋しい影を射し

て身動きも出来ない。みんな黙ってしまつて、隣りの連れは抱き合ふ様に、身を寄せてゐる。私は、一人だから手を組み合はせ、足を竦めて、ちつとしてゐる。

通つてしまふと、隣りにまた、ぼつりぼつりと話し出す。けれども、矢張り、私には、様子も言葉もはつきりしない。しかし、しつとりした、しめやかな団欒を私は羨ましく思ふ。

私の前に、障子が裏を向けて、閉てある。その障子の紙を、羽根の燃れた様になつて飛べないらしい蜂が、一匹、かさかさ、かさかさと上つて行く。その蜂だけが、私には、外の物よりも非常にはつきりと見えた。

隣りの一連れも、蜂を見たらしい。さっきの人が、蜂があると言つた。その声も、私には、はつきり聞こえた。それから、こんな事を云つた。

「それは、それは、大きな蜂だつた。熊ん蜂といふのだらう。この親指ぐらゐもあつた」

さう云つて、その人が親指をたてた。その親指が、また、はつきりと私に見えた。何だか見覚えのある様ななつかしさが、心の底から湧き出して、ちつと見てゐる内に涙がにじんだ。

「ビードロの筒に入れて紙で目ばりをする、と、蜂が筒の中を、上つたり下りたりして唸る度に、目張りの紙が、オルガンの様に鳴つた」

その声が次第に、はつきりして来るにつれて、私は何とも知れずなつかしさに堪へなくなつた。私は何物かにもたれ掛かる様な心で、その声を聞いてゐた。すると、その人が、またかう云つた。

「それから己の机にのせて眺めながら考へてゐると、子供が来て、くれくれとせがんだ。強情な子でね、云ひ出したら聞かない。己はつい腹を立てた。ビードロの筒を持って縁側へ出たら庭石に日が照つてゐた」

私は、目のあたつてゐる舟の形をした庭石を、まざまざと見る様な気がした。

「石で微塵に毀れて、蜂が、その中から、浮き上がるやうに出て来た。ああ、その蜂は逃げてしまつたよ。大きな蜂だつた。ほんとに大きな蜂だつた」

「お父様」と私は泣きながら呼んだ。

けれども私の声は向うへ通じなかつたらしい。みんなが静かに起ち上がつて、外へ出て行つた。

「さうだ、矢張りさうだ」と思つて、私はその後を追はうとした。けれどもその一連れは、もうそのあたりに居なかつた。

そこいらを、うろろろ探してゐる内に、その連れの立つ時、「そろそろまた行かうか」と云つた父らしい人の声が、私の耳に浮いて出た。私は、その声を、もうさつきに聞いてゐたのである。

月も星も見えない、空明りさへない暗闇の中に、土手の上だけ、ぼうと薄白い明りが流れてゐる。さっきの連れが、何時の間にか土手に上って、その白んだ中を、ぼんやりした尾を引く様に行くのが見えた。私は、その中の父を、今一目見ようとしたけれども、もう四五人の姿がうるんだ様に溶け合つてゐて、どれが父だか、解らなかった。

私は涙のこぼれ落ちる目を伏せた。黒い土手の腹に、私の姿がカンテラの光りの影になつて大きく映つてゐる。私はその影を眺めながら、長い間泣いてゐた。それから土手を後にして、暗い畑の道へ歸つて来た。

花火

私は長い土手を伝つて牛窓の港の方へ行つた。土手の片側は広い海で、片側は浅い入江である。入江の方から脊の高い蘆がひろひろと生えてゐて、土手の上までのぞいて居る。向うへ行く程蘆が高くなって、目のとどく見果ての方は、蘆で土手が埋まつて居る。

片方の海の側には、話にきいた事もない大きな波が打つてゐて、崩れる時の地響きが、土手を底から震はしてゐる。けれども、そんなに大きな波が、少しも土手の上迄上がつて来ない。私は波と蘆との間を歩いて行つた。

暫らく行くと土手の向うから、紫の袴をはいた顔色の悪い女が一人近づいて来た。さうして丁寧に私に向いて御辞儀をした。私は見たことのある様な顔だと思ふけれども思ひ出せない。私も黙つて御辞儀をした。するとその女が、しとやかな調子で、御一緒にまゐりませうと云つて、私と並んで歩き出した。女が今迄歩いて来た方へ戻つて行くのだから、私は怪しく思った。丁度私を迎へ

に来た様なふうにものを言ひ、振舞ふ。しかし兎も角もついて行つた。女は私よりも二つか三つ年上らしい。

すると入江の蘆の生えてゐる上に、大きな花火が幾つも幾つも揚がつた。綺麗な色の火の玉が長い光りの尾を引いて、入江の水に落ちて行つた。女がその方を指しながら、

「あの辺りはもう日が暮れてゐるので御座います。早く参りませう。土手の上で夜になると困りますから」と云つた。

私はこんな入江に花火の揚がるのが、何だか昔の景色に似てゐる様に思はれた。

段段行く内に蘆の脊が次第に高くなって来て、私の頭の上に小さな葉の擦れ合ふ音がするやうになつた。すると辺りが何となく薄暗くなって来て、土手が夜に這入りかけたらしく思はれた。さうして海の上の空が、鮮やかな紅色に焼けて来た。暗くなりかけた浪がしらに薄い紅をさして不思議な色に映えて来た。私はそれを見て、それから女を顧みた。女は沖の方を指しながら、

「沖の方も、もう日が暮れてゐるので御座います。早くまゐりませう」と云つた。

ぢきに、真赤に焼けてゐた空の色が何処となく褪せかかつて来た。入江の向うの遠くの方から、紙の焼けた灰の様なものが頻りに海の上の赤い空へ飛んだ。



「あれは海の蝙蝠で御座います。もうここも日が暮れるので御座います」と女が云った。

土手の上が暗くなって来た。私は心細くなった。浪の響や蘆の葉の音が私を取り巻いてしまった。女の淋しさうな姿が、はつきりと私の眼に映ってゐる。私はこの陰気な女と一緒に、碌な事はない様な気がし出した。けれども一筋道の土手の上で、道連れを断るわけには行かないから、黙って歩いて行つた。すると道の片側がぼろと明かなくなつて来た。驚いてその方を振り向いて見たら、蘆の原の彼方此方に炎の筒が立ってゐて、美しい火の子がその筒の中から暗い所へ流れて出ては跡方もなく消えてゐる。その辺りの空には矢張り火花がともしたり消えたりしてゐた。火花の火の玉が蘆の中に落ちたんだらうと、その景色に見惚れながら私は思った。

「左様で御座います。今にここいら一面に焼けて参りますから、早くまゐりませう」と女が云った。

土手の妙な所から、女が入江の側に下りて行つた。私もその後をついて下りた。もう向うには、牛窓の港の灯がちらちら光つてゐるのに、女と離れられない。私はその灯を見ながら、女について行つたら、浅い砂川のほとりに出た。女がそのほとりを足早に伝つて行つた。暫らく行くうちに、砂川はぢき消えてしまつて、長い廊下の入口に出た。女がそこへ私を案内して這入つた。私はも

う行くまいと思ひ出した。さう思つて女の方を見ると、女は涙をためた目でちつと私の方を見ながら黙つてゐる。私は引き込まれるやうな氣持がして、女について行つた。

廊下を歩いて行くと、段段狭く暗くなって、足もともわからなくなつた。何処かで廊下の曲がつた時、向うの端にぼんやりしたカンテラの柱にともつて居るのが見えた。その光りが廊下の板にうるんだ様に流れてゐた。女と私が次第に押しつけられる様になつて来た。私は段段息苦しくなつて、もう帰り度いと思つた。女が私をこんな所へ連れて来たわけが、次第に解つて来た様に思はれ出した。私は早く土手の上で別かれればよかったと思つた。すると左側に広い白ら白らした座敷のある前に来た。まだ日が暮れては居なかつたと思つて、私はほつとした。その次にもまたも一つ座敷があつた。その座敷の本当の真中に、見台がきちんと据ゑてあつて、その上に古びた紙の帳面が一冊拡げてあつた。私が何の氣もなくその方を見てゐると、女が、それを読んでくれれば何もかもわかると云ふ様な風に見えた。私はあわてて、目を外らしてその前を行き過ぎた。何だか非常に怖いものに触れかけた様な氣持がして心が落ちつかない。向うに縁があつて、手水鉢の上に、手拭がひらひら舞つてゐる。私はその手拭掛の下まで来て、ぼんやり起つてゐた。もう帰り

うと思った。すると女が私の前に跪いて、しくしく泣きながら私の顔を見た。

「もう土手は日がくれて真暗で御座います。どうかもう少し私の傍に居て下さいませ」と女が云った。私は黙って、帰る事を考へながら起つてゐた。何処かでさあさと云ふ風の渡る様な音が頻りに聞こえた。

「蘆の原に火がついて、もう外へは出られません。あれは蘆の茎が何千も何万も一度に焼け割れてゐる音で御座います」と女がまた云った。けれども私は帰らうと思つた。こんな女の傍にゐるのは恐ろしい。

すると女がまた云った。「土手は浪にさらはれてしまひました。もう御帰りになる道は御座いません」

さう云つてしまふと、俄に大きな声を出して泣き始めた。さうして、顔を縁にすりつける様にうつ伏せになつて、肩の辺りを慄はせた。女の上で、手拭掛の手拭がひらひらしてゐる。私はその間に帰らうと思つて、そこからもとの廊下に引返しかけた。その時に、私はふと縁にうつ伏せになつてゐる女の白い襟足を見入つてゐた。女は顔も様子も陰気で色艶が悪いのに、襟足丈は水水してゐて云ひやうもなく美しい。私は、不意に足が竦んで、水を浴びた様な氣持がした。私はこの襟足を見た事があつた。十年昔だか二十年昔だかわからない、どこかの辻でこの女に行き会ひ、振り返つてこの白い襟足を見た事

があつた。ああ、あの女だったと私が思ひ出す途端に、女がいきなり追つかけて来て、私のうなじに獅噛みついた。

「浮気者浮気者浮気者」と云つた。

私は足が萎へて逃げられない。身を悶えながら、顔を振り向けて後を見ると、最早女もだれもゐなかつた。それなのに、目に見えないものが私のうなじを掴み締めてゐて、私は身動きも出来ない、助けを呼ばうと思つても、咽喉がつかへて声も出なかつた。

短夜

私は狐のばける所を見届けようと思って、うちを出た。暗い晩で風がふいてゐた。町を少し行つてから、狭い横町に曲がり、そこを通り抜けて町裏の土手に上った。私はその土手を伝つて、上手の方へ歩いて行つた。土手の下は草原で、所所に水溜りがあつた。歩いてゐる拍子に、時々その水溜りが草の根もとに薄白く光ることがあつた。向う側には竹藪が続いてゐて、その向うに大川が流れてゐるのだけれども、此方の土手からは見えない。大水の時にはこの土手の下にも水が流れて川になるから、所所に橋が架かつてゐる。私はその橋の袂まで来て、渡らうかどうかと思つた。橋を渡れば藪の方へ行つてしまふ。狐は藪の中にゐるのだけれども、もつと先の方がよからうと思つて又土手の上を伝つて行つた。するとふと何だか氣にかつたので、何の氣もなく後を振り返つて見たら、大きな螢が五六十四一列になつて、さつき渡らうかと思つた橋の真上を、向うの藪の方へすうと流れ

て行つた。変だなと思ふと、螢が一度に消えてしまつた。

大水の時の水が残つて、そのまま大きな池になつてゐる所まで来た。私はそこで土手を下りて、池の辺りを伝つた。水の乾いた所に好い加減な石があつたから、それに腰をかけて、向うを眺めてゐた。時々風が吹いたり止んだりした。空は一体に低く曇つてゐるけれども、雲が薄いと見えて、所所に光りのない白い星の見える事があつた。

暫らくすると、向うの暗い藪の中から、大きな狐が一匹、のそのそと出て来た。真暗な中に狐の姿丈がはつきりと浮かんで見えた。狐はうろろとそこいらを見廻してから、池の縁まで来て、前脚で水の中を頻りに掻き廻した。小さな波の輪が薄白い池の面に拡がって、びちゃびちゃと云ふ水の音も微かに聞こえた。狐はその前脚に引掛かつたあめんどろを引き上げて、妙な風に頭からかぶり出した。すると池の真中の辺で、不意に水音がしたから、驚いて見たら、暗い水面の一尺ばかり下を、大きな鯉が一匹勢よく泳いでゐるのがはっきりと見えた。さう思つて見ると、そのもつと底の方に、その鯉よりも遙かに大きな鯉が、矢張り同じ方に向いて、勢よく泳いでゐるのが一枚一枚の鱗の数へられる程はつきりと見えた。おやと思ふ拍子に鯉は二匹とも消えてしまつた。さうし